

永久年中書写出家作法について

白 土 わ か

新資料「永久年中書写出家作法」は、曼殊院古文書中に所蔵されていたものである。

縦18.2cm、横57.3cmの卷子本で、一度、裏打ちして補装したあとがみえるが、外題には「^(マ)出家作法」とあり、その下に、補装以前に記された文字「略私」が、透かしてみられる。内題「出家作法」の右には、「永久年中依二条阿闍梨詔所令抄出給也」と記されている。

永久年中(一一三一一一八)の抄出書写「出家作法」というのは、日本天台の現存「出家作法」写本中、最古の部に属するものではないかと推定される。天台書籍綜合目録(渋谷亮泰)や、その他の目録にもこの資料の名はみえないし、叡山文庫所蔵のいくつかの「出家作法」よりも時代的に古く、門葉記^{注①}所載の同作法よりも前のものである。

又、この「永久年中書写出家作法」(以下曼殊院本出家作法とよぶ)は、女人の出家作法である点も、あわせて留意すべきことであろう。以下、その全文をにかけて紹介することとする。

(マ)
出家作法 略私

永久年中依二条阿闍梨詔

所令抄出給也

意をへちこつてある。以て、その全文をなめて採食することとする。

又出家作法

本々中書で出家作法（以て學經詞本出家作法とある）が、又人の出家作法である点も、あつたが附

きつゝ先灑水

次三礼

次如来唄

諸の顯次表白

のついでに諸の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

謹敬蓮花台上摩訶毗盧遮那

佛の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

國圖如來千花千百億國諸釋迦牟尼

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

之の佛西方極樂化主旃陀種覺

隨事可改之。謂は、本々中書で出家作法（以て學經詞本出家作法とある）が、又人の出家作法である点も、あつたが附

歸十方三世正等覺者舍那所證

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

薄心地戒品八万十

顯蜜聖教文殊の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

弥勒等ノ諸大苾芻摩訶薩埵妙海

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

王子等ノ若干ノ菩薩埵羅云

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

優婆離等ノ諸賢聖衆一代教中ノ

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

護法善神殊ヘ奉始南岳天台ヲ

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

三国伝燈伝戒師資大師等ノ聖

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

別テ我

（山カ）東西楞嚴満山

三寶乃至盡空等云々

の顯次を述べ、次合舊經持合目錄（持合舊經）や、その顯の目錄にさこの持條の字がある。

夫出家者は出離生死之基也故

白土

諸仏存落周。羅而入佛ノ道ニ袈娑^(マ)

者亦无上福田之衣也故志泥^{ナイ}。汨^{ワシ}

者著之^{キテ}□破魔軍ヲ何呪一切宍生

雖備タリト佛性ヲ非レハ大乘ノ禁戒ニ

頭コト之ヲ難ク真如ノ冥薰^(暫カ)□クモ

雖无シト。癡スルコト依羯^{コシ}。磨ノ儀式ニ

発心修行スル處ナリ

而ニ女^(大カ)□施主桃顔暗ニ老テ无常ノ

□自^(概カ)発御之間禪定大夫人臨テ

薨御之剋ニ堅固ノ大苾心旅染^{ソム}

肝^{キモ}□給ヘリ依之撰吉日良辰ヲ

顯佛像ヲ奉テ写経卷ヲ三智五

眼ノ證明之前ニ落テ花ノ簪^{カサシ}ヲ

成如来ノ御弟子ト給是則宿善ノ

所催ス淨戒ノ開発今在此時

□心至^{イサヤコ}テ潔シ諸仏ノ摩頂在^リ

不疑^ニ作願^ニ□云々

次神分

次出家者礼氏神国王父母ヲ後

礼師長ヲ 次令唱一ノ偈ヲ

流轉三界中 恩愛不能斷 弃恩入无為佛惠イ本

眞実報恩者

偈意云流轉生死ノ身欲報生死之

恩ヲ自他俱沉シツムテ無出離之期故

出テ家ヲ修道ヲ弃ステ恩ヲ入佛惠ニ

給フ處ナリ□ヲ名ケテ眞実ノ報恩

者ト自行化他所脩給也

次脫俗服令著出家衣ヲ然後ニ和上ノ

前ニ可令胡跪即説テ法ヲ云

衆生ノ髮ホツ。毛サウ。爪サウ。齒シ骨セヒ。皮ヒ。血ヘリカウ。肉ヘ。自首至テ

跌併以不アツラニ□□ヲ无不成ト云コトセスト成皆是

以貪愛ヲ。シテト為本無免マヌカルコト 生老病死之苦

故為留メムカ分段之輪廻ヲ出恩愛之

家ヲ給フ處ロナリ是以破リ形ヲ

守テ志ヲ厭イトヒ生死之鄉ヲ捨ステ、

此ノ苦空无常□身ヲ可得タマフ彼ノ

常樂我淨之果ヲ

次可説出家ノ功德ヲ

其詞云出家之功德經教ノ説雖多シト

先出シテ一両ノ□ヲ信心ヲ可奉令懷ク

満ラム四天下ニ羅漢ヲ百年供養セムヨ

出家受戒ノ功德ハ勝ト彼ニ云ヒ

或ハ出家受戒ノ功德勝タリ造ニモ

八万四千ノ塔ヲ或一日一夜ノ

出家修道ノ□徳ヲ以テノ故ニ二百

万劫不墮惡道ニ説給ヘリ

今女大施主ノ成如来ノ御弟子ト

是則其時ノ至レル也永離惡趣ノ

生ヲ至苾ノ彼岸ニ給コト不可疑

次以香湯灌頂

讚曰善哉大丈夫 能了世无常

捨俗趣泥洹 希有難思議三反

次可令敬礼十方ノ仏ヲ

次出家者自□偈云

帰依大世尊 能度三有法 亦願諸宥生

次剃頭 此間可唱毀形唄ヲ

毀形守志節 □□无所親 棄家弘聖道

願度一切人

次授与袈裟ヲ 受者胡跪云々

其詞袈裟(ケサ)ハ是恒沙之仏ノ解脱

幢相之衣也若人得ツレハ之ヲ諸佛

随喜下マ□天□恭敬シ夜叉羅刹

皆生怖畏ヲ故離生死ヲ所至

获ニ也尺迦大師三世ノ諸仏以

之ヲ度タマフ衆生ヲ故所授サツクル之也

殊可生□□ヲ給ツ

若ハ優婆塞鉢羅花比丘尼ノ因縁堅誓師子

事等委了可示之云々

次受者頂戴シテ受ミ受了テ返セ

和上ニ如此三反然テ後チ為ニ令メヨ

着莫カレ□□着コト之云々

次授法号ヲ

次出家者説偈云

大哉解脱服 无上福田衣 被奉如戒行 廣度諸冗生

又説自度偈云

適哉值チャツ仏者 何人誰不喜 福願与时會 我今獲法利

次授戒

任(マ)ノルニ妙樂大師等ノ授(付カ)扶戒儀ニ以

十二ノ門トテ雖分別下マフト今存畧

省ヘンイヘン繁カウカウイヲ梗概可奉授之

先開導 或ハ戒ハ是无上サ菩之

本也或ハ不レバ持戒ヲ非仏ノ御弟子ニ

名クト魔ノ眷属ト説キ或ハ不持レバ

戒ヲ野干ノ身ヲタレモ得(マ)コト難シ

何呪功德ノ身乎ト説タマヘリ

或ハ苾ノ戒ハ有テ受法无捨法

有レトモ犯不ツク失尽ス未来際ヲ

故以此ノ千仏ノ大戒ヲ為燈シテ□出□イヒ

生死之長夜ヲ列ツラネテ 諸仏苾ノ

教ニ超過□四魔ヲ可超コユ三界ノ

苦ヲ龍神八部ノ翼從衛護シ

奉タテマツリ 給ハムコト不限今□ニ

怠オコガリ 給コト可无ナカル

次三歸

歸依佛ニ歸依法ニ歸依僧ニ也

佛者内ニハ指シ十方三世^{（一切カ）}□□諸仏ノ

五眼三身ノ功德ヲ外ニハ^{ハシメテ}始自

優田^{ウツノ}匿王^ノ之造立泥木素像^{テイソツ}ノ

住持ノ佛寶也

法者一切ノ諸仏ノ所證□□ノ法輪也

言住持ノ此寶ヲ者ハ又指ス周王ノ□□ヨリ始テ黃紙朱軸ノ

經卷ヲ

僧者普賢文殊□□等ノ諸ノ

苾羅云優婆離身子目□□等ノ

諸賢聖^{（等カ）}□□ナリ

此ノ帰三寶ノ功德聖教之説

不可勝^{アケ}テ計^{カツヘ}或ハ若人帰依佛

不墮^{ツイ}三惡道ト云ヒ或□□

決定三苾ト云フ等カ如也

仍應教言 仏子某甲願從

今身盡未來際 帰依佛両足尊

帰依法離欲尊 帰依僧衆中尊□

弟子某甲等從今身盡未來際

帰依佛竟 帰依法竟

歸依僧竟三說（類品）

不疑聖人不

次可請師闍婆不 不疑聖人不

弟子某甲等奉請尺迦如來應正等不

覺為和止我依和王故得受苾

戒慈愍故（禮）拜（禮）闍婆（禮）

弟子某甲等奉請文殊師利苾

羯磨阿闍梨我（禮）禮（禮）闍婆（禮）

弟子某甲等奉請迦勒苾為教授

阿（禮）我（禮）禮（禮）闍婆（禮） 天上苾耆闍婆

弟子某甲等奉請一切如來為（禮）闍婆

為師我（禮）禮（禮）闍婆（禮）

弟子某甲等奉請一切苾耆為同学

等侶我（禮）禮（禮）闍婆（禮） 天上苾耆闍婆

自對諸苾耆心（禮）禮（禮）闍婆（禮） 天上苾耆闍婆

次懺悔（禮）其根不（禮）闍婆（禮）

雖須運（禮）逆順心（禮）習（禮）給（禮）

故（禮）先唱（禮）偈頌（禮）可懺悔无始眼量

以來之三業六情根之罪障之三業六情根

至心懺悔无始来 自他三業无量罪

如佛所懺悔 我今陳懺且如是

是以罪障ハ是非本有之法ニ四句ニ

推檢スルニ其跡不可得也及往スル

自性清淨之心ニ時惡業重障

悉消滅シナムトス百年ノ暗室ニ得

燈ツレハ黑暗併去ヌルカ如シ

次發菩提心 先可令唱四弘ヲ

衆生无边誓願度 煩惱无边誓願断

法門无盡誓願智 无上菩提誓願證

不發菩提心ノ大乘ノ淨戒无開發

故發シテ此ノ四弘誓願ヲ蒙リ諸仏ノ

護念ヲ戒品ノ功德ヲ可令現前給

次隨テ奉ニ問遮難ヲ如実可答□

汝不曾出佛身血不応答云无

不敬父不 不敬母不 不敬和上不

不敬阿闍梨不 不敬羯磨僧不

不敬聖人不

既无遮難堪受戒品ヲ拈起テ

專注□重之心ヲ可受之ヲ

次ハ正奉授戒ヲ

先弁ヘテ三種ノ戒ノ相ヲ起シ信心ヲ

次白四羯磨シテ^(案カ)□可受持三聚

淨戒十重禁ヲ給也

初相伝ノ戒者奉始自盧舍那如来

至于某次第相傳タルコト十九代

也今随某受之給フ相ヒ当リ第廿代ニ

於此相傳戒名句文身ニ盡

未來際ヲ能持給ツヤ不ヤ

答云持三説

次發得戒今白四羯磨シテ金剛ノ

宝戒ヲ心境ニ發得下マフ是也

汝清淨ノ仏子^{オイテ}於此ニ起信給不ヤ

答云信三説

次性得戒 自性清淨ノ真如ノ

性戒凡聖悉クニ備タルナリ然則

於此ノ本有常住ノ性戒ニ汝清淨

比丘尼能ク信不 答云信 三説

先弁へ三種ノ戒ノ相ヲ起コト信ヲ了

次可奉授三聚淨戒ヲ三聚淨戒

撰律儀戒ト者ハ是斷一切ノ惡ヲ也

則十重冊八輕等ノ一切ノ律儀也

是斷德ノ曰也依持此戒ヲ終成ス法身ヲ

次撰善法戒ト者ハ修諸善ヲ也即

聞思修等ノ三惠八万四千ノ諸ノ

法藏也是智德ノ曰也依持

此戒ヲ終成報身ヲ

次饒益有情戒トイフハ慈悲喜捨ヲ為

心ト布施愛語利益同事ヲ為

行シテ利益一切衆生ヲ也是恩德

曰也依持此戒ヲ終成ス應身ヲ

此ノ三聚淨戒ハ三世ノ一切ノ苾芻覺カ

持之ヲ所成佛マ也比丘尼女大、

成テ佛マ出家ノ御弟子ト列リ

苾芻數ニ持此ノ三聚淨戒

可顯如來ノ三身ヲ之處也

汝清淨比丘尼願受ハ盡未來際ヲ

攝律儀戒、撰善法戒、饒益有情

戒能持テムヤ不ヤ答云持三説

次可奉授十重禁戒ヲ

此十重禁戒ハ舍那所證ノ心地ノ

法門也依受持之ヲ甘露之門罪業

即開テ正入諸仏之位ニ處ナリテ

故勵シテ信力ヲ可受ケ持之ヲ非異言

一者不敎生戒一切衆生ノ所惜ハ

身命也而忘ヲスシ慈悲ヲ行ス敎害ヲ四

現當ノ惡報不輕カルカ若持不敎生戒ヲ者

得十種之功德ヲ故自コヲ敎シ不可

令人シテヲ敎乃至方便セテ讚歎敎

見作隨喜見呪敎見敎回見敎緣見敎法

敎業可留之ヲ若心ホシイマヲ恣ニシテ

敎生スルハ非真ノ苾芻ニ是仮名之

苾芻ナリ無慚无クシテ愧犯波羅刈

夷罪ヲ十汝從今身盡未來際

不敎生戒能持不不答云能持命

二者不偷盜戒苾芻ハ以布施ヲ

為先ト而ヲ他人ノ不与物ノ返テ

掠取之現当罪報不輕若持不偷盜

戒者得十種功德ヲ

汝從今身盡未來際ヲ不偷盜戒

能持不 答□□持

三者不姪戒 欲愛 突ハ是流來

生死之基トシテ現当ノ惡報不輕

若持不姪戒ヲ者得十種功德ヲ

汝從今身盡未來際ヲ不姪ノ戒

能持不 答云能持

四者不妄語戒 異□是惱マシ一切

衆生ヲ受无量劫ノ苦ヲ若持之者

有十種ノ功德故□□種ノ非聖言ヲ

常可住正語正見ニ 汝等云々

五者不沽酒戒 □□令人起罪業ヲ

曰緣也而沽之ヲ与人ニ背背ノ

兼濟ニ 汝等□

六者不說四衆過戒 既出家ノ仏ノ

御弟子ト成コト□□何ソ還テ顯サム

四部ノ御弟子ノ過ヲ□□汝等云々

七者不自讚毀他戒 苾芻以慈悲ヲ

為宗ト而自讚毀他二部相兼タル其

過不輕 汝等云々

八者不慳貪戒 薩婆撰生ヲ為宗

而乍富財宝ニ□□ヲ還以惡心ヲ

致罵詈誹謗ヲ惡報不輕

汝等云々

九者不嗔恚戒 苾芻以忍辱ヲ為懷

以惡口罵辱ヲ不聽善言ノ懺謝ヲ

其報不輕 汝等云々

十者不誹謗三寶戒 過阿僧祇劫

不聞三寶名ト云テ三寶ノ名ヲタニモ

奉聞難シ今□□生大乘機熟之

國ニ飽マテ奉値遇三寶ニ還テ

誹謗三寶ヲ之罪業無量劫之苦

患不輕 汝等云々

次冊八輕戒

一々ニ不能分別スルコト其相貌ヲ

汝從今身盡マテ未來際ヲ冊八輕ノ

六 裁慾シテ能持ヤ不 答云能持

既ニ剃首ヲ為佛ノ御弟子ト着テ

袈裟ヲ受金剛ノ寶戒ヲ了（了は了る）

思（シ）ニ其功德ノ廣大ナルコトヲ須弥大海

非喻（ト）ヒニ現世ニハ百廿年之間功德

善根（ト）ニ修（シ）向後ニハ離（ハ）テ三惡（ト）

趣（ト）ノ生ヲ見仏聞法之縁無絶（ト）

可御之者也 論スルニ得脱之時節ヲ

既ニ不可過樓（ル）至仏出世ヲ盡（ス）

未來際ノ羯磨 莊嚴シ常住之（ト）

法身ヲ給ハムコト非ス言ノ及ヒ意ノ

所ニ及善根不限（ト）一家ノ諸大施主

息災延命ノ願念成就シ乃至（ト）惡心（ト）

法界平等利益 藏（ト）□（ト）堪（ト）半（ト）マ（ト）然（ト）宗（ト）

南无 式等云々

次廻向宗（ト）而自覺（ト）覺（ト）二消（ト）跡（ト）兼（ト）其（ト）

ト善不自覺（ト）覺（ト）覺（ト） 其（ト）ハ以慈悲（ト）

この曼殊院本出家作法は「惠心作とされる「出家授戒作法」^②に近いものがあるように思われる。但し惠心作の方は、

菩薩沙弥戒を授けるものであり、曼殊院本出家作法の方は、三聚淨戒と梵網十重禁四十八輕戒を授ける、いわゆる大僧戒である。すなわち曼殊院本は「出家作法」ではあるが、出家の作法と大僧戒の授戒との二つの部分よりなるものである。一日、中宮親王の出家の儀に於て

全体として、恵心作のものよりは内容も形式も拡充して、かつ具体的であるという特徴をもつ。二、嘉承二年曼殊院本出家作法中の授戒作法については、本文中に「妙樂大師等の授菩薩戒の儀に十二の門とを以て分別し給ふ」と雖も、今存略繁を省いて梗概を授け給ふべし」とあるが、最澄の「授菩薩戒儀」にも出ている十二門の中に「(一)開道・(二)三帰・(三)請師・(四)懺悔・(五)発心・(六)聞遮・(七)授戒までをあげているのみである。それも最澄の「授菩薩戒儀」の叙述よりは簡單で、又、より具体的に作法が記されている。三聚淨戒や梵網十重禁戒の二々についても、具体的に説明がなされ、その戒を保つべき理由にふれているのが注目される。三、即ち、もとより日本入平中のこととして、日本天台の大乗戒は、最澄・円仁・安然の頃までに思想的な展開をとげ、それを確立したが、それ以後は、さしたる進展なく、戒の伝受に重きがおかれ、平安中期以後は次第に形式化し、しかも複雑な戒脈となつてゆく方向を辿るが、一般の人々の間にも出家の慣習がゆきわたつていった平安中期以後の出家作法が、この曼殊院本である。とみることで、一般の人々の間にも、作法形式の整備とともに、形式化していったあともみられる。たとえば、授戒のさいに、「未來際を尽して能く持ち給ふや不や」と問うのに対して、「答えて持つと云ふ、三説」とあるが、こうした例はこの作法中、他に何箇所もあつて、その時の応答形式が丁寧にきめられていることである。これは四分律の戒法等にも、こうした応答のさい、答に「能」と記されていることはあり、又、恵心作の場合にもみえるが、形式として、よりきつそう整備されたものということができるであらう。四、戒の授けられる人々、すなわち出家といふ、俗世を棄てて佛門に帰依した平安時代の人々の、心の軌跡を辿る資料として尊重すべきものであることはいうまでもない。またこの曼殊院本出家作法は、女人のためのものであつた。その表白中に「而るに女大

施主桃顔暗らに老いて、无常の觀自ら発御の間、禪定大夫人薨御の剋に臨んで、堅固の大菩提心いよいよ肝に染[□]給へり。之に依て、吉日良辰を撰んで佛像を頭はし、経巻を写し奉りて三智五眼の証明の前に、花の簪を落して如来の御弟子と成り給ふ」とあり、又、出家の作法のあとの授戒の場合には「汝清淨比丘尼」と記されてあるのによつても知られる。無常觀を自ら発していた女性が、禪定大夫人の薨御によつて、いよいよ大菩提心を強くし、落飾剃髪して佛弟子となり給うと理解すべきものと思われるが、身分のある女性が、禪定大夫人とよばれた人の死によつて出家の心を起したのであらう。禪定大夫人とは出家の女性をさすが、その女性が薨御云々とあるところから、それは女院または摂関家等の女性であることが知られる。

内題の右にある、「永久年中に二条阿闍梨の詔によつて抄出せしめた」という記載は、この出家作法が、永久より前のものか、もしくは永久年中のもので、しかも、この曼殊院本より長くくわしいものがあつたことを示している。二条阿闍梨という僧については、目下は知るよしがないのであるが、禪定大夫人といわれた人については手がかりはないであらうか。永久年中の抄出という点から、これをかりに永久に近い頃か、もしくは永久年中のこととして推定するなら、小野宮皇太后歿子（康和四年八月十九日歿、承暦元年出家^⑤）藤原師実室麗子（永久二年四月三日歿、康和四年五月廿六日出家^⑥）・中宮篤子（永久二年十月一日歿、嘉承二年九月廿一日出家^⑦）らがあり、その他、藤原俊家室（康和五年三月十三日歿、尼^⑧）がある。小野宮皇太后歿子は元亨釈書にも出ている篤信の女性である。何れも推測の域は出ないが、永久年中のことと考えるなら、中宮篤子あたりのこととすべきであらうか。併しまだ何れとも、きめ手はない。ただ、この曼殊院本の出家作法は、女院のものではないと思われるのである。それは「殿曆」に、嘉承二年九月廿一日、中宮篤子の出家のことを記して

今日中宮尼ニ成給御髮戒師奉剃始之後
於北面女房奉剃云々

賢邇法印戒師……

御佛不懸、不置梵王經、是當時大皇太后宮御出家例也……女房御匣殿同成尼^{出家云々}

とあって、御佛をかけず、經（梵網經か）おかぬ風習を示しているが、曼殊院本出家作法には、「仏像を頭はし經卷を写し奉りて」とあるからである。^⑤

禪定大夫人とよばれたのは何れの女性であったか分明ではないが、その人に近い関係にある女性の出家のさいに用いられたのが、曼殊院本出家作法とみるべきであろう。

又、この出家作法には、授戒の相伝を、盧舍那佛より始めて十九代の某より授戒し、第廿代の相伝者になると記されてあるが、これは、大事なきめ手になるものである。しかし、円頓戒相承血脉譜は、区区としていて、目下はこの点についても明確なものが見出せないのは残念である。これも後日にその考究をまちたい。青蓮院藏血脉譜によれば、十九代は良忍の頃となる。併し、他の血脉譜もあわせて調査せねばならぬところである。

又、さらに、曼殊院本出家作法は、恵心作「出家授戒作法」に似たものがあると記したが、恵心作作法の表白の中に、一日一夜の出家の功德を、百緣經・僧祇律・出家功德經等をあげて強調しているのに対して、曼殊院本出家作法には、出家の功德を説いてもその中に、「或いは一日一夜の出家修道の功德を以ての故に、二百万劫惡道に堕ちずと説きたまへり」とあるが、それは恵心作のものの影響を受けて、それがより文学的にくだけて表現されたもののようにある。

一日一夜の出家の功德云々というのは、かの源氏物語宇治十帖の中で、浮舟の出家に関して、後世、還俗非還俗の議論のまところとなったところであるが、曼殊院本出家作法は、この点についても、一つの考究資料を提供するものではないかと思われる。尤も、浮舟の場合は、菩薩沙弥戒の授戒であったかもしれない。曼殊院本出家作法にはまた、授与袈裟の次に、「若くは優婆羅花比丘尼の因縁、堅誓師子の事等委しく之を示すべし」とあるが、優婆羅花比丘尼の因縁については大智度論卷十三・四分律・有部毗奈耶その他に出ており、又、慧沼の「受菩薩戒法」^⑥にも引用され、

この説話はかなり流布していたものであったと思われる。智度論卷十三に、優婆羅華比丘尼本生經中に説く説話として出されているものによると、^④優婆羅華比丘尼が、諸々の貴婦女に語って、いふには「姉妹よ出家せよ。出家してかりに戒を破ることがあつても、受戒の因縁によつて、一時は地獄におちても、後に道果を得ることになる。自分もかつて前世では比丘尼衣をまといながら戲笑したこともあつた」(以上取意)という話である。いわゆる還俗せよというのではない、かりに戒を破り地獄に墮することがあつても、出家受戒の功德により、道果に至るというのである。^⑤

又、堅誓師子というのは、賢愚經卷十三の堅誓師子品の説話によつたものであろう。この説話によると、剃頭し袈裟を着た出家の身でありながら、獵師となつて、師子を射ようとしたものがあつた。師子は、それに抵抗して害を与えようと思つたが、獵師が出家の姿であることをみて思いとどまり、その矢を受けたというのである。それは、出家染衣の人は、やがて必ず解脱を得るものであり、又、三世の聖人の標相でもある。今、自分が、この獵師に害を与えるのは、三世の聖人に害を与えることになるからであるといふのである。その獵師とは提婆達多の前生であり、師子とは釈尊の前生であつたといふ本生譚である。^⑥

優婆羅華比丘尼の説話にしても、堅誓師子の話にしても、何れも、出家の功德を尊重する話である。たとえ戒を犯し破ることがあつても、出家とは道果に至る前提であることを強調する話である。大乘佛教の出家や戒への意識の一端を示すものともいえるし、平安中期の人々の出家に対する考え方を示唆するものともいえるであらう。^⑦

以上、非常に大まかな推測めいた解註をつけ加えたが、平安中期以後、出家を希望した一般の人々の、佛教への姿勢を知るよすがともなるし、又、日本天台の戒律の系譜の一資料としても注目すべきものと思われる。なお仔細な考究については後日にゆずることにした。

注④ 大正藏圖像部一二、門葉記卷百、六七頁以下、出家圖出……又、醍醐寺藏同書出。

注⑤ 大正藏圖像部一二、門葉記卷百、六七頁以下、出家圖出……又、醍醐寺藏同書出。

注⑥ 大正藏圖像部一二、門葉記卷百、六七頁以下、出家圖出……又、醍醐寺藏同書出。

② 恵心僧都全集五、五四五頁以下

③ 伝教大師全集一、三〇三頁以下

④ 中右記、康和四年八月十九日「或入云皇太后去十七日夜半許崩給由有其告者皇太后諱歡子年來修佛法生年八十二云

可謂賢女歟」(史料大成9、中右記二、二〇九頁)

⑤ 元亨釈書卷一八(大日本仏教全書一〇一、二一八頁)

⑥ 殿曆永久二年四月三日・中右記全日の記録。出家は殿曆康和四年正月廿六日。(大日本古記録殿曆四、九四頁・中右記四、

二八八頁。殿曆一、一〇二頁)

⑦ 中右記、永久二年十月一日・殿曆全。出家は中右記・殿曆。(中右記四、三六五頁・殿曆四、一三三頁。出家は中右記三、

二六六頁・殿曆三、二三四頁)

⑧ 中右記康和五年三月十三日の記録(中右記二、二七三頁)

⑨ 但し中右記の同日の記録には、「先例、或机上被置梵網云々」と横に注がある。

⑩ 恵谷隆戒「円頓戒概論」二九九頁参照

⑪ 記統二一〇一、九左

⑫ 大正藏二五、一六一 a

⑬ 大正藏四、四三八頁

曼殊院本出家作法翻刻にあたっては、できるだけ異字・古字・略字はとどめるようにしたが、印刷の都合上現代文字に直したのは、所・戒・云々・處・雖・哉・解・德・備・血・尼・部・夷・郷・疑・離・撰等である。又、仮名は現代字体に直した。

僧土の意義について